

# 複基点の方向を表す後項動詞の意味用法

石 恩 京

## 1. はじめに

「複基点（注1）の方向」とは、一方的方向を表す「単基点の方向」に対するものである。「複基点の方向」の前提としては複数の動作主および対象であるが、複数の動作主および対象の組み合わせによって示される方向については以下のように考えられる。

- ①「動作主」と「共同動作主」との間で成り立つ相互の働きかけ
- ②「動作主」から「対象」への働きかけ

①は、述語の表す動作の主体が複数存在する場合で、動作主と共同動作主とが前提となる。一方、②は、動作主に対して複数の対象が存在する場合である。

本稿では、①に属すると考えられる「－あう」、「－かわす」および②に属すると考えられる「－あわせる」に焦点を当てて考察を進める。なお、「－あう」と「－かわす」においては類義語関係を中心に、「－あわせる」においては意味記述を中心に考えてみる。

## 2. 「－あう」

仁田（1998：1）は、「－あう」を用いて複合動詞を作る方法について、「〈非相互動詞〉や〈半相互動詞〉を〈相互動詞〉に変える最も生産的な手段である」と述べる。そして、以下のように、「－あう」が付くことによって形成される三つの複合動詞構文をそれぞれ「まものの相互構文」、「第三者の相互構文」、「持ち主の相互構文」とした。このような分類は、受動態の分類と非常に類似しており、「－あう」のヴォイス（注2）としての側面を考慮するからこそできる分類であると考えられる。

- （1）広志ガ 武志ト 殴リアッタ。[まものの相互構文]
- （2）広志ガ 武志ト 次郎ヲ 殴リアッタ。[第三者の相互構文]
- （3）広志ガ 武志ト 頬ヲ 殴リアッタ。[持ち主の相互構文]

このように、「－あう」は、相互動作を表す後項動詞であると同時に、相互態（相互構文）を作るヴォイスの一種として扱われる後項動詞である。そのため、「－あう」については、単なる相互動作を表すものとして扱うだけではなく、ヴォイスとしての特徴をも踏まえて考える必要がある。

## 2.1. 「－あう」とヴォイスの関連性

『現代日本語文法2』（2009：207）は、「ヴォイスとは、事態の成立に関わる人や物を表す名詞が、どのような形態的なタイプの動詞とともに、どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリーである」とし、「ヴォイスと関連する表現には、接辞によって表される可能構文と自発構文、複合動詞によって表される相互構文があり、「派生や複合といった文法的な手段で表されるわけではないが、再帰構文もヴォイスと関わりをもつ」と記述する。

また、『新版日本語教育辞典』（2005：107、586）は、ヴォイスについて「文を構成する動詞の語形と名詞の格関係が交替するという統語的な現象」とし、「ヴォイスの現象を特徴づけるものとして、①文の意味構造（主語の文法役割の交替）、②統語形式（格の交替）、③動詞の形態にかかわる問題」を挙げる。そして、「受身、使役、自発、可能、等々の表現がヴォイスにかかわる現象としてとりあげられるのが普通であるが、そのなかで、受身（能動－受動の対立）が典型的なもの」とであると説明する。

以上の記述からすると、ヴォイスの定義におけるキーワードとなっているのは「動詞の語形」と「格の交替」であることが分かる。つまり、日本語のヴォイスの核となるものは（4b）であるが、「動詞の語形」と「格の交替」からすると、（5b）も含めるのが一般的なのである。

- （4） a.            太郎が 次郎を なぐる。[能動構文]  
      b. 次郎が 太郎に なぐられる。[受動構文]
- （5） a.            太郎が 次郎を なぐる。[非使役構文]  
      b. 花子が 太郎に 次郎を なぐらせる。[使役構文]

村木（2000：132）は、（4）（5）におけるaとbとの関係から見出される現象、つまり、「文を構成する動詞の語形と名詞の格関係が交替するという統語的な現象」をヴォイスとして定義している。しかし、これはヴォイスの形式的側面に過ぎず、ヴォイスをきちんと把握するためには、「コミュニケーションにもとづく機能の側面」というヴォイスのサブカテゴリーを含めて問題にする必要があると強調している。

村木（1986：64～65）のいうヴォイスのサブカテゴリーとしては、動詞の語形が能動形でも文の意味構造が受動表現である迂言的な受動表現（「歓迎をうける」「注目を集める」）や、授受関係を表す構文などが挙げられており、用例（6）のa'、b'、c、c'のような相互構文もヴォイスのサブカテゴリーとして捉えている。相互構文の場合、動詞の語形はヴォイスとしての対立にかけているが、文の意味構造と形式構造の間で規則的な対応関係が見られるものであるとし、広義の意味でのヴォイスとして捉えているのが分かる。

- （6） a. 太郎が 次郎を なぐる。[非相互構文]  
      a'. 太郎が 次郎と なぐりあう。[相互構文]  
      b. 次郎が 太郎を なぐる。[非相互構文]

- b'. 次郎が 太郎と なぐりあう。[相互構文]
- c. 太郎と 次郎とが なぐりあう。[相互構文]
- c'. 次郎と 太郎とが なぐりあう。[相互構文]

## 2.2. 「－あう」の特殊性

城田（1998：152～154）は、「－あう」を「相互態動詞」とし、他の後項動詞とは別のカテゴリーとして扱っている。城田によれば、「相互態動詞」による文には「内容の著しい増大が発生する」。これは他の後項動詞では見られないことであり、「－あう」の特殊性として考えられることであろう。「内容の著しい増大」については以下の通りである。

- (7) a. 太郎ハ 次郎ヲ 撲ッタ。
- b. 太郎ハ 次郎ト 撲り合ッタ。
- (8) a. 太郎ハ 禁煙ヲ 父ニ 誓ッタ。
- b. 太郎ハ 禁煙ヲ 父ト 誓イ合ッタ。

(7a)において「撲る」動作をするのは「太郎」で、「次郎」は動作を受ける側である。しかし、(7b)の表す事態では、「太郎」は「撲る」動作をする側であると同時に「撲る」動作を受ける側でもあり、「次郎」にも同じことが言える。また、aとbの表す意味に差が生じるのは(8)も同様である。(8a)で「誓う」のは「太郎」だけであるが、(8b)では「太郎」と「父」が「誓う」ことを意味することとなり、2つの文の意味する内容に著しい差が出てくる。

このように、「－あう」が用いられたことで、aとbの表す意味に差が生じることが確認できる。また、aとbの意味する内容に差が出ることには、格も大いに関係していると考えられるが、(7)(8)に見られる「次郎 $\boxed{\text{ヲ}}$ →次郎 $\boxed{\text{ト}}$ 」「父 $\boxed{\text{ニ}}$ →父 $\boxed{\text{ト}}$ 」といった格の変更は注目すべきところである。

## 2.3. 「ト各」と「－あう」の2種

### 2.3.1. 「ト格」の2種

森山（1988：134）は、「ト格」には2種があり、(9)のような「相互的格成分」としての「ト格」と(10)のような「共同行為者」としての「ト格」とを挙げる。さらに、「共同行為者」としての「ト格」の場合は、「一緒に」が共起できると述べる。

- (9) 太郎が花子 $\boxed{\text{と}}$ 結婚する。
- (10) 太郎が花子 $\boxed{\text{と}}$ （一緒に）本を読む。

(9)の「花子」は、「太郎」の結婚相手としての存在であり、結婚が実現するためには欠くことのできない成分である。それに対して、(10)の「花子」は、「太郎が本を読む」ことに関して影響を与える存在ではなく、「共同行為者」として考えられる存在であるた

め、文の必須要素とは考えにくい成文である。

ところで、「相互的格成分」を表す「ト格」に「一緒に」が共起した場合、「ト格」の意味に変化はあるのだろうか。「一緒に」の有無による「ト格」の意味について考えてみる。

(11) 太郎が花子<sup>と</sup> 結婚する。(用例(9))

(12) 太郎が花子<sup>と</sup>一緒に結婚する。

(11)の「花子」は、前述のように、「太郎」の結婚相手としての存在を表す「ト格」で、必須不可欠の要素である。それに対して(12)では、「ト格」に「一緒に」が共起することによって、「太郎」と「花子」がそれぞれの相手と結婚するという意味を表すこととなる。場所もしくは時間などを同じくして2人がそれぞれの相手と結婚する、とも解釈できるだろう。従って、「花子」は、「太郎」の結婚相手としての存在でもなければ、「太郎」の結婚が実現するにあたって影響を与える存在でもない。「花子」は「太郎」の、「太郎」は「花子」の「共同行為者」としての存在なのである。

このように「相互的格成分」としての「ト格」に「一緒に」が共起すると、「共同行為者」を表す「ト格」に成り代わるという格の意味変化が生じる(注3)。

### 2.3.2. 「-あう」の2種

森山(前掲、134~135)は、「ト格」と対応して「-あう」にも2種があると述べるが、基本的には2種の「ト格」の用法に対応して「-あう」の用法があると考えられる。

(13) 太郎が次郎<sup>と</sup> 殴りあった。

(14) 太郎が次郎と一郎<sup>を</sup>殴りあった。

(13)において、「太郎」は「次郎」の「殴る」相手として存在し、「次郎」は「太郎」の「殴る」相手として存在する。つまり、「太郎」と「次郎」との関係は、「殴りあう」という事態が成立するために必要な存在なのである。しかし、(14)における「太郎」と「次郎」との関係は、「ヲ格」名詞である「一郎」が付加されることで変わる。「太郎」と「次郎」はお互いを相手とするのではなく、「一郎」を相手として「一緒に一郎を殴る」「交互に一郎を殴る」ということが想定されるが、この場合の「太郎」と「次郎」との関係は「一郎を殴る」ことを共同に行う相手としての存在となる。

姫野(1999)は、お互いを相手とする場合を「相互動作」と呼び、同じ対象を相手とする場合を「共同作業」と呼ぶが、両者の違いは格の違いで確認できる。「相互動作」を表す「-あう」は、お互いを相手とするので「ト格」を取り、それに対して「共同作業」を表す「-あう」は、対象を相手とするので「ヲ格」を取る。

また、(13)と(14)とで見られる違いは、以下のように、「一緒に」もしくは「共に」が共起する場合でも見られる(注4)。

(15) 太郎が次郎と 殴りあった。(用例 (13))

(16) 太郎が次郎と 一緒に／共に殴りあった。

### 3. 「-かわす」

「-かわす」は、人が動作主となって、動作主同士が互いに働きかけることを意味する後項動詞である。「鳴き交わす」のように、鳥・虫・獣などが動作主となる場合もあるが、基本的には人が動作主となる。

「動作主同士の相互的働きかけ」という意味から、「-かわす」と類似する複合動詞として「-あう」が挙げられる。しかし、「-かわす」は、「-あう」の意味用法に比べて非常に限られている。複合動詞の語例を見ても、「かわす」を後項動詞とする複合動詞は、「あう」を後項動詞とする複合動詞に比べてはるかに少ない。実際、『大辞林』の見出し語を見てみると、「-かわす」型複合動詞として立項されているものは以下の10語のみである。

言い交わす、(礼砲を) 打ち交わす、酌み交わす、差し交わす、取り交わす、泣き交わす、鳴き交わす、見交わす、申し交わす、呼び交わす

しかも、「差し交わす」「取り交わす」の前項動詞が接頭語のような働きをすること、「申し交わす」が「言い交わす」の謙譲語であることを考えると、「-かわす」を後項動詞とする複合動詞は、わずか7語程度である。

#### 3.1. 「かわす」の本義

諸辞書における「かわす」の語義をみると、「かわす」は本来、「互いにやりとりをする」ことを意味する。「互いにやりとりをする」という語義は、「かわす」と結びつく名詞によって、さらに以下のように、①と②に分けて考えることができる。①は、実際に物を相手からもらったり相手に与えたりする場合を表し、②は、主に「ことばの受け答え(注5)」を表す。

① [手紙・契約書・指輪など] を交わす。

② [言葉・挨拶・視線・意見・約束など] を交わす。

ここで、②に分類される「視線」という名詞に注目したい。『明鏡国語辞典』(以下、『明鏡』)は、「かわす」と結びつく名詞として「視線」を挙げるが、「ことばの受け答え」という点からすると、他の名詞類とは異質なものであると考えられる。

「視線」とは非言語的なものである。非言語的なものは、ことばだけでは伝わりにくい情報を伝えるなど、時にはことばより重要な役割を担うこともある。したがって、「視線」は、ことばを補完するという働きから、意思を伝達する手段としてことばに等しい機能を果たすと考えられる。

### 3.2. 後項動詞としての「かわす」

後項動詞としての「かわす」は、「互いにやりとりをする」という本動詞としての意味を色濃く受け継いでいる。そのため、(17) で見られるように、「互いのやりとり」を前提とする動作主同士の相互的働きかけを表す。

(17) あいさつを言い交わす。(『広辞苑』)

次の(18)の「-かわす」は、「互のやりとり」の意味に加え、やりとりが行われるその瞬間をも表現できるのではないかと考えられる。見ることが実現するその瞬間を切り取って表現できるのは「-かわす」の特徴であり、「-あう」にはないニュアンスであると考えられる。

(18) 驚いて顔を見交わす。(『大辞林』)

## 4. 「-あう」と「-かわす」

複数の動作主が同じことを行うという意味では、「-あう」と「-かわす」の共通点は確かに認められる。実際、辞書の記述を見ても「-かわす」は「-あう」に言い換えられている場合が多々ある。しかし、「-かわす」が「互いのやりとり」を表し、尚且つ「やりとりが行われるその瞬間」をも表すことができるのを考えると、「-あう」とは区別する必要がある。

以下、「-あう」と「-かわす」の意味用法の相違について、「言いあう」と「言いかわす」とを挙げて考えてみる。

### 4.1. 「言いあう」

次の(19)～(25)の「言いあう」は、「言葉を交える(注6)」ことで発展する場合である。「言いあう」と結びつく格としては「ヲ格」と「ト格」が挙げられるが、それぞれについては以下のように述べる。

#### 4.1.1. 「ヲ格」＋「言いあう」

(19) 口々に意見を言い合う。(『明鏡』)

(20) 昨年の冬、万葉旅行でみんなで歩いた土地のことを言い合うだけでも、自分の心は此の上もなくなくさめられた。〈阿川弘之「雲の墓標」〉(『学研国語大辞典』、以下『学研』)

(19)(20)の「言いあう」は、同じことについて複数の人がそれぞれ言うことを表す。

(19) の場合は、「口々に」からも分かるように、互いに対しての相互的な働きかけとは言いがたく、「おおぜいの人それぞれきそうように言うこと（様子）（注7）」を表すと言える。また、(20) の場合は、その場に存在する人、特に、万葉旅行に関係するすべての人がそれぞれの思い出について言うことを表す。

なお、(19) (20) の「言い合う」は、交互に行われることを表すので、主として「ヲ格」を取る。それに対して (21) ～ (25) の「言いあう」は、ほぼ同時に行われることとして捉えられ、「ト格」を取る場合と「ト格」を取らなくても「ト格」が前提となる場合がある。

#### 4.1.2. 「ト格」＋「言いあう」

(21) 同僚と言い合う。（『大辞林』）

(22) 遺産をめぐって兄と言い合う。（『明鏡』）

(21) (22) の「言い合う」は、「ト格」を伴うことによって、動作主同士の相互的な働きかけであることを明確に表すことができる。この場合の「言い合う」は、「言い争う」「口論する」「口げんかする」といった意味を表すが、それは前項動詞である「言う」の特徴によるものであると考えられる。

長嶋（1979：88）は、「いう」について、「伝達を目的とせずに単に〈ことばや音声を発する〉という表出の機能を持っている」とし、「いう」の伝達方法について「一方的」であると述べる。

このような意味特徴を有する「言う」が「－あう」と結びつくと、相互の一方的な行為を表し、「言い争う」「口論する」「口げんか」に発展してしまうこととなる。

#### 4.1.3. その他

以下の (23) ～ (25) の「言い合う」は、「ト格」を取らずに動作主同士の相互的な働きかけを表す場合であるが、(21) (22) の「言い合う」と同様、「言い争う」「口論する」「口げんか」を表す意味である。

(23) 子供の問題で両親が言い合う。（『小学館日本語新辞典』、以下『新辞典』）

(24) 些細なことで言い合う。（『ベネッセ表現読解国語辞典』、以下『ベネッセ』）

(25) 負けずに言い合う。（『広辞苑』）

(23) の「言いあう」は、「ガ格」の複数を表す名詞と結びついているが、「複数名詞ガ－しあう」の形で複数の動作主同士の相互的な働きかけを言い表すことができる。また、

(24) (25) の「言い合う」は、「ト格」も動作主も伴わないが、「些細なことで」「負けずに」によって「A が B と」もしくは「B が A と」という動作主が前提であると考えることができる。なお、(23) の「言い合う」と同様、動作主同士の相互的な働きかけを表す

ものとして捉えられる。

ところで、『広辞苑』は、「言い合う」について以下のように記述するが、①の意味記述は、他の辞書には見られないものであり、注目したいところである。

- ①互いに言い交わす。「お世辞を言い合う」
- ②言い争う。口論する。「上司と言い合う」「負けずに言い合う」
- ③同じことを多くのひとが相応じて言う。「口々に言い合う」

森田（1989：1064）は「言葉を交える」ことで「言いあう」または「話しあう」に発展すると指摘するが、①の意味記述に見られる用例の「言いあう」は、「言いかわす」の意味として用いられる場合である。「言葉を交える」ことで「言いあう」または「話しあう」に発展するという森田の指摘は必ずしもそうとは限らず、「ヲ格」に立つ名詞によって決まると言えるのではないだろうか。

#### 4.2. 「言いかわす」

「言いかわす」は、「かわす」の本義②の意味を受け継ぎ、「ことばの受け答え」を意味する。以下の用例からも分かるように、(26) は、質問と返答であり、(27) は、二言三言で終わる短いやりとりである。また、(28) は「返礼として、相手と同じ挨拶を言う（注8）」ことを表す。

- (26) 『いくらなの』『五円』二人は笑いながら斯う言い交わすと直ぐ別れた〈田村俊子「木乃伊の口紅」〉（『学研』）
- (27) 二こと三こと言い交わして別れる。（『新辞典』）
- (28) あいさつを言い交わす。（『明鏡』）

#### 4.3. 「－あう」「－かわす」の相違・相似

「－あう」と「－かわす」とは、動作主同士それぞれが同じことを行うという意味では共通する後項動詞である。辞書の記述を見ても、「－あう」と「－かわす」は「互いに…しあう」という意味として扱われており、両者共に動作主同士の相互的働きかけを表すと解釈できる。

しかし、動作主同士の相互的働きかけといっても、「－あう」と「－かわす」とではそれぞれ異なる意味を表す。「－あう」は、単なる「互いのやりとり」を超えて、「ト格」を取ることも分かるように、互いに影響しあう意味をも表す。これに対して「－かわす」は、本来の意味を大いに受け継いでいるため、「ヲ格」を取って「互いのヲ格のやりとり」を意味する。

このようなことから「－あう」は「動作主同士における真の相互的働きかけ」であると言うべきで、「－かわす」は「動作主同士の相互的働きかけ」というよりは「それぞれの動作主によるそれぞれの動作・行為」とであると言える。



## 5. 「－あわせる」

「あわせる」は「あう」の他動詞（注9）として挙げられる動詞である。「あわせる」は、語形および意味から、使役形として扱われることもあるが、本稿では、「あう」の使役形としてではなく「あう」の他動詞として扱う。なお、後項動詞の場合においても、「－あう」の他動詞は「－あわせる」とする。

### 5.1. 辞書における「－あわせる」の意味記述

「－あわせる」の後項動詞としての意味用法が記述されている辞書は以下の通りである。

『大辞林』

①物と物とを一つにする。

「二枚の布を縫いあわせる」「原料をまぜあわせる」

②互いにある行為をする。

「誘いあわせて花見に行く」「駅で待ちあわせる」

③偶然にある同一の状態になる。

「事件の現場に居あわせる」「同じ電車に乗りあわせる」

『明鏡』

①…して一つにする。

「重ねあわせる」「縫いあわせる」「詰めあわせる」「組みあわせる」

②…して同異を調べる。

「引きあわせる」「照らしあわせる」「問いあわせる」

③互いに…する。また、前もって互いに…する。

「読みあわせる」「誘いあわせる」「示しあわせる」「申しあわせる」

④偶然に…する。

「聞きあわせる」「乗りあわせる」「居あわせる」「持ちあわせる」

『ベネッセ』

①互いに…する。

「誘いあわせる」「照らしあわせる」「見あわせる」

②同じ時、場所にたまたま…する。

「居あわせる」「来あわせる」

以上の意味記述から「－あわせる」の意味としては「複数のものを一つにする」「互いに…する」「偶然…する」が挙げられる。「互いに…する」「偶然…する」という意味は3種の辞書に共通するため、ここでは「複数のものを一つにする」という意味記述に関して言及する。

「複数のものを一つにする」は、本義を大いに受け継いだ意味である。この意味での「－あわせる」型複合動詞は、他の意味を表す複合動詞に比べて数も多く意味記述が必要とされる。それにも関わらず、「あわせる」の後項動詞としての用法が記述されていない場合や、「一つにする」という意味がないのは、「－あわせる」の本来の意味が色濃く残っているからであろう。このことは「布を縫い合わせる」を「布をあわせる」と言えることから確認できる。

## 5.2. 「－あわせる」の意味

### 5.2.1. 「一つにする」

森田（1989：102）は、「あわせる」の本来の意味を「複数の物事を一つになす行為」とであるとすが、後項動詞としての「あわせる」の意味についても、基本的に本来の意味にしたがって考える。

- (29) そば粉と小麦粉を捏ね合わせる。（『大辞林』）
- (30) 牛乳と卵をよく混ぜ合わせる。（『明鏡』）
- (31) 木材を組み合わせて筏を作る。（『明鏡』）
- (32) 果物を詰め合わせた籠。（『大辞林』）
- (33) 肉料理にサラダを付け合せる。（『大辞林』）

「一つにする」という意味を表す「－あわせる」型複合動詞には（29）（30）の「捏ね合わせる」「混ぜ合わせる」のように「混ぜて均一にする」意味の他、（31）（32）の「組み合わせる」「詰め合わせる」のように「複数の物に特定の操作を加えてひとまとまりにする」意味を表すものも見られる。また、（33）の「付け合せる」のように、結果的に複数の要素が合体する（29）（30）または（31）（32）とは異なるが、「全体の調和」としてまとまったことを言い表す場合もある。

森田（前掲）は、このような「一つにする」意味を表す「－あわせる」について、「物と物とを一緒にする。一本化する、行為」であることを述べ、物理的な接着・混合ばかりでなく配合・調和も一致の一つであると述べる。

### 5.2.2. 「偶然…する」

森田（前掲）は「偶然…する」という意味に属する複合動詞については、「人間の意志に関係なく、また、意志に反して事柄や事態がある時機と一致することは、たまたま……となる、偶然性を表す」と説明する。

このような意味は辞書の記述を見ると明らかであるが、辞書（『大辞林』）による意味記述については以下の通りである。

- ・居あわせる　：ちょうどその場にいる。
- ・通りあわせる　：たまたまその所を通りかかる。

・巡りあわせる：思いがけなく出合う。

ところで、『明鏡』は、「－あわせる」の意味として、他の辞書と共通する「一つにする」「互いに…する」「偶然…する」の他、「…して同意を調べる」の意味を立てている。また、「互いに…する」の意味とは別に「前もって互いに…する」の意味を記述している。以下、『明鏡』の意味分類にしたがって、3種の辞書の語例をそれぞれの意味に対応させ、「－あわせる」の意味について考察を進める。

### 5.2.3. 「前もって互いに…する」

この意味としての複合動詞は「示しあわせる」の他、「言いあわせる」「(日程を)打ちあわせる」などがある。

(34) 二人は言い合わせたように同じ本を買ってきた。(大辞林)

(35) 旅行の日程を打ち合わせる。(大辞林)

(36) 示し合わせて、二人一緒に逃げ出す。(大辞林)

(34)～(36)の「言いあわせる」「打ちあわせる」「示しあわせる」は、『大辞林』の意味記述によると、それぞれ「あらかじめ話し合って決めておく」「前もって相談する。下相談する」「前もって相談をしておく」という意味を表す。意味記述の中の「あらかじめ」「前もって」「前もって…しておく」からも分かるように、「－あわせる」は『明鏡』の記述通り、「前もって互いに…する」という意味も含めると考えられる。

### 5.2.4. 「…して同異を調べる」

『明鏡』は、「問いあわせる」を「…して同異を調べる」の意味として挙げているが、対象を必要とする「照らしあわせる」と異なって、動作主を必要とする複合動詞である。しかも、動作主同士の相互的働きかけとして見ることはできず、動作主から相手へ向けての行為なのである。なお、「照らしあわせる」は、対象を必要とする複合動詞であるため、『ベネッセ』が「互いに…する」意味として挙げている「照らしあわせる」は「…して同異を調べる」の意味に入れるのが適切であろう。

## 6. おわりに

本稿では、「上へ」「下へ」「内へ」「外へ」といった一方的方向を表すものとは別に、「－あう」「－かわす」および「－あわせる」を挙げて「複基点の方向」を表すものとした。

まず、「－あう」と「－かわす」は、「動作主」と「共同動作主」との間で成り立つ相互的働きかけを表すものとし、類義語の観点からも論じた。

「－かわす」は、人が動作主となって動作主同士が互いに働きかけることを意味し、「－あう」と類似する後項動詞として挙げられる。しかし、「かわす」を後項動詞とする複合

動詞は非常に少なく、「－あう」の意味用法に比べて限られている。また、「－かわす」は、本義を色濃く受け継いでいるため、「互いのやりとり」としての動作主同士の相互的働きかけを表す。

それに対して、「－あう」は、単なる「互いのやりとり」を超えて、「ト格」を取ることからも分かるように、互いに影響しあう意味をも表す。特に、「－あう」については、単なる相互関係を表す後項動詞とするには、ヴォイスの問題が大いに関わってくるため、ヴォイスとしての特徴も踏まえて考える必要がある。

「－あわせる」については、「動作主」から「対象」への働きかけを表すものとし、主に、意味分類について論じた。意味分類の際には、複合動詞の語釈はもちろん、前項動詞および「ヲ格」に立つ名詞の種類を確認する必要があるが、これによって「－あわせる」の意味として考えられるものは、本義の意味を大いに受け継いだ「複数のものを一つにする」の他、「偶然…する」「前もって互いに…する」「…して同異を調べる」が挙げられる。

### 【注】

- (注1) 日野(2001: 91)によると、方向を表す後項動詞は「基準点によってそれぞれの方向が定まる」。本稿では、基準点が1つである場合を「単基点の方向」とし、複数の動作主・対象が前提となる場合を「複基点の方向」とする。
- (注2) 村木(1986: 64)は、「動詞と文の統語構造との間に成りたつ規則的な対応関係」をヴォイスといい、対応関係を成している動詞の形態をさす場合を形態論的なカテゴリーとし、文の統語構造をさす場合を統語論的なカテゴリーとして区別している。
- (注3) 仁田(1974: 4)によると、「一絡ニ」を付加させることによって、「ト格」のみで表される文と「ト一絡ニ」で表される文とは意味構造が異なる。つまり、「〈動作の受け手〉であるところの「Xト」は、それに「一絡ニ」という語句を続けることによって、その〈動作の受け手〉という役割を失い、行為を別箇に、しかも同時に行う共同行為者に成り下がる」といい、「動詞の表す行為の成立に直接影響のない成分は、動詞の有する〈行為の体制〉に含まれない成分であり、したがって、〈格成分〉でないということになる」と述べる。
- (注4) 仁田(1998: 15)は、「NガNトVシアウ」の「Nと」の後ろに「一絡ニ(共ニ)」を付加すると、「Nト {一絡ニ／共ニ}」全体が付加的な共同行為者に成り下がり、動きの成立に直接的に参画する別の関与者が必要になる」と述べる。
- (注5) 『明鏡』の「遣り取り」②を参照。
- (注6) 森田(1989: 1064)は、「言葉を交わす」と「言葉を交える」とでは次のような相違点があると指摘する。「言葉を交わす」は、単に「お早よう」「今日は」とあいさつし合う程度(あいさつを交わす)であるが、「言葉を交える」となると、互いに共通の話題が接点となって、話し合ったり、言い合ったりするところまで深入りしてくる。だから単に手紙をやりとりするだけのことに「手紙を交える」などと言ったりはしない。「砲火を交える」「一戦を交える」「ひざを交えて語り合う」「チャンピオンとグローブを交える」など、ABがぶつかり合い、接触し合う意識がある。」
- (注7) 『新明解』の「口々」①を参照。
- (注8) 『新明解』の「言(い)交(わ)す」①参照。
- (注9) 「あわせる」のほか「あわす」も「あう」の他動詞として挙げられる。ただ、辞書の傾向として、「あわす」より「あわせる」の語形での立項が多く、「あわす」は「あわせる」を

参照させることが多いため、「あう」の他動詞は「あわせる」に限定する。

### 〈参考文献〉

- 城田 俊 (1998)『日本語形態論』ひつじ書房  
長嶋 善朗 (1979)「イウ・ハナス・シャベル・ノベル・カタル」『ことばの意味2 辞書に書いていないこと』平凡社  
仁田 義雄 (1974)「対称動詞 (Symmetrical Verb) と半対称動詞 (Meso-Symmetrical Verb) と非対称動詞 (Anti-Symmetrical Verb)」 - 格成分形成規則のために『国語学研究』13東北大学文学部国語学研究刊行会  
\_\_\_\_\_ (1998)「相互構文をつくる「V シアウ」をめぐる」『阪大日本語研究』10 大阪大学  
日本語記述文法研究会 (2009)『現代日本語文法2』くろしお出版  
日野 資成 (2001)『形式語の研究 ―文法化の理論と応用―』九州大学出版会  
姫野 昌子 (1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房  
村木新次郎 (1986)「ヴォイスの輪郭」『国文学解釈と鑑賞』51-1 至文堂  
\_\_\_\_\_ (2000)「ヴォイス」『別冊国文学 現代日本語必携』53 学燈社  
森田 良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店  
森山 卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

### 〈参考辞典〉

- 『学研国語大辞典』第2版 1988年 学習研究社  
『広辞苑』第5版 1998年 岩波書店  
『小学館日本語新辞典』初版 2005年 小学館  
『新版日本語教育辞典』初版 2005年 大修館書店  
『新明解国語辞典』第6版 2005年 三省堂  
『大辞林』第2版 1995年 三省堂  
『ベネッセ表現読解国語辞典』初版 2003年 ベネッセコーポレーション  
『明鏡国語辞典』初版 2003年 大修館書店

(そく うんぎょん 本学日本学研究所研究員)